

シリーズ 酪農学園の精神 (10)

「酪農学園の精神」シリーズを終えるにあたって  
— 新たな「酪農学園の精神」の方向 —

酪農学園大学

名誉教授 工藤 英一

「酪農学園の精神」シリーズを終えるにあたって  
— 新たな「酪農学園の精神」の方向 —

はじめに	3
一 酪農学園の精神(1)～(9)まで読みかえしてみて	5
(1) 松井幸夫「酪農学園設立の理念とその現状」	5
(2) 松川 清「窮乏の底に沈める国」	8
(3) アーサー神塚「二十一世紀に向けて三愛精神の意義と役割」	10
(4) 井上昌保「大学自治における学生の役割について」	14
(5) 太田一男「酪農学園の教育理念とキリスト教育」	17
(6) 川上克己『「心の故郷」の想いを現実に』	21
(7) 種池哲朗「獣医学科―基礎教室の誕生とその後の変遷から探る―」	23
(8) 村岡範男「協同組合の社会的意義」	26
(9) 小山久一「酪農学園の建学の精神に育てられて」	29

(10)	工藤英一「酪農学園大学との出会いと学生たちとの思い出」	32
	新たな「酪農学園の精神」の方向	38
①	「自主独立」の精神を	38
②	これからの「健土健民」とは	40
③	酪農学園大学らしい研究の方向を	43
④	酪農学園らしい取り組みを	44
⑤	いただいた恩は忘れてならない	46
⑥	酪農学園大学同窓会校友会に期待する	47

はじめに

酪農学園の精神シリーズが始まったのは二〇〇四年である。当時の酪農学園大学同窓会校友会は学科ごとに同窓会が活動していて事務局が分かれていた。各学科の事務局長が一堂に会して会議を開き、学科間の連携を図り同窓会の活動を始めた。

ご存知のように同窓会活動は全体をまとめるものとして高校、短大も含め「同窓会連合会」があつたが、それぞれ独自の活動方向と予算等の問題もあつてそちらとは一体化していない中で、大学の同窓会校友会の活動が独自に行われてきた。そんな中で、私が二年間校友会の事務局長を担当した時点で、「酪農学園の精神」シリーズが始まった。

当時の記憶では酪農学園が七〇年経過して「歴史の重みが増すことに反比例して、だんだんと酪農学園の理念や精神が形骸化しつつある」ことが危惧され、また、「酪農学園の歴史を証言する先生方が次々と他界されること、そしてそのことがそのまま酪農学園の精神も失われていくのに直結していく

のではないかとの危機感」があることを指摘されている。

また、このような「精神」については「本来酪農学園が意識的に行わなければいけないことである」と指摘した。事務局長であった私としては教鞭をとった先生方をはじめとして学園の方向性を決める理事長や理事などにも執筆をお願いしたかったが、結果的には理事者側からの執筆という方向性は取られず、教員を中心としたシリーズが続き、今回最後の一〇号を迎える。個人的には残念な感情もあるが、酪農学園としては学園長を中心として様々な出版物を発行する体制が整ってきているようだ。本来的には一個人がその役割を果たし続けることには、それなりに問題もあると思うが、それについてはこれ以上触れない。

大学同窓会校友会が一本化し事業が進められているこの時期にシリーズが終わる良い機会なのかもしれない。私自身も定年を迎え、六年経過しているので段々と気力がなくなってきているが、老骨に鞭を打って書かなければならないと思っている。学園も新しい体制に入っているので、どうぞ教員も職員も、そして学生たちも協力して新しい「学園づくり」に取り掛かっていた

だきたい。

一 酪農学園の精神 (1) ～ (9) まで読みかえしてみて

教員による「酪農学園の精神」の執筆は、研究・教育の現場から酪農学園の精神を見直し、その評価をすることになり貴重な歴史的価値を持つシリーズになった。二〇〇四年から始まったシリーズであるが、今回まで、なんと一二年かかっている。さすがに先生方の酪農学園に対する想いをそのままにして前に進めなかった。しかし、もとよりこのシリーズで取り上げたものを批評するものでもなく、自分なりに読んで感想を述べるに過ぎないことをお断りしておきたい。

(1) 松井幸夫「酪農学園設立の理念とその現状」(二〇〇四年四月)

松井先生は各種学校として発足した昭和二四年の酪農学園大学部開設(助手として採用)の時代から平成五年三月退職(名誉教授)まで、実に四三年

間にわたって教鞭をとられた、酪農学園の歴史とともに歩んでこられた方だ。昭和二〇年代当時の粗末な校舎、研究施設や大学内のぬかるんだ中央道、給与の支給も滞りがちな状況などのお話は現在からは考えられないものである。

また、当時の黒澤理事長はデンマークの酪農による興国方法が我が国に当てはまること、戦後の我が国の「農業、特に寒冷地の北海道農業は家畜を導入し、その糞尿を土に返し（循環農業）、農薬や化学肥料を必要としない健全な土を作ることが第一です。そこより収穫した飼料作物を摂取した家畜より得られる牛乳、乳製品を人間が摂取することが、健康な国民を造ることにつながります。そのためにはキリスト教を基盤とした農村青年教育をすることが手始めで、その実行こそが日本農業・日本の発展につながる」（P9）と説かれたことを紹介している。キリスト教精神については、松井先生はしばしば触れている。デンマークでのゲルドヴィのキリスト教教育（P7）や酪農民の拠出した基金で創設された「酪農義塾が酪農学園三愛精神の基になった」ことも紹介されている。

樋浦誠先生のことは、草創期のことであるのでご存じない方も多いと思うが、僕も昭和三九年の入学の時に樋浦学長更迭事件と、学生によるストライキにいきなり遭遇して面食らったものだ。樋浦先生は昭和二四年の酪農学園大学部開設時に学長となり、その後昭和二五年酪農学園短期大学学長、昭和三一年酪農学園機農高校校長兼務、昭和三五年酪農学園大学酪農学部酪農学科新設の時に学長となっているので、文字通り酪農学園の草創期を支え、その後の発展に尽力した一人だ。「先生は、熱心なキリスト教徒であると共に、非常に個性的な性格の持ち主で、情熱家であり、激しい口調で塾生（三愛塾）に語りかけられた」（P13）と紹介されている。樋浦先生はよほど学生たちに愛されたのか、平成二二年短期大学六〇年・大学五〇年開学記念酪農学科同窓会事業では「樋浦誠先生遺稿集」が出版されている。あとがきでは「科学者としての樋浦誠先生。先生はこの酪農学園草創期において様々な偉業をなされましたが、ほとんどは熱心な教育者であり、キリスト教の伝道者としての横顔を示されておりました。しかし忘れてはならないのは、偉大な科学者であったということです」（水野直治）と紹介されている。

さて、松井先生は現在までの学科新設に対し、次から次と新設される学科づくりについてそれが果たして「創設者たちの設立の理念を具現化するものか」との疑問を発せられています。巷でも酪農学園は変わり身が早いといわれることもありますが、一度立ち止まって松井先生のご意見を傾聴することが現在求められている。なお、先生は平成二七年八月八七歳で召天された。

(2) 松川清「窮乏の底に沈める国」(二〇〇五年三月)

松川先生は昭和三六年酪農学園大学に助手として採用されて、平成六年退職されるまで三三年間教鞭をとられた。その間ザンビア獣医大学に出向され、さらに退職後もザンビア大学教授(三年間)、さらにジオルダン大学でも三年間教授として活躍された。このテーマも暗示的で、中国訪問から話を始められたのは先生の生まれ育った歴史と大いに関係がある。

先生は昭和四年中国遼寧省遼陽で日本人のご両親の下で生まれている。小学校三年生の時、初めて日本への旅行をする。一六歳の時、日本が敗戦、その後北大農学部と獣医学部で学び、酪農学園大学に職を得る。ご自分の中国

での生い立ちや終戦後の日本と中国とのかかわりの中で、中国人の考え方や日本人の考え方の違いを知る数少ない一人かもしれない。また、お母様がキリスト者であり、お父様もYMCA活動にかかわられたこともあり、武藤富男（戦後明治学院大学長）と知り合ったそうである。武藤富男は昭和二年に賀川豊彦を呼びかけ人としてキリスト教新聞を創刊し、後に社長に就任している。

さて、松川先生が酪農学園で黒澤西蔵に対して「小柄な体から発するオーラ、諄々と説き語る信念には敬服せざるを得なかった。基本に流れる三愛精神、それを農業に当てはめれば循環農法、資本主義体制に生き延びるためには協同組合と考えは一貫する。そして農民のための実学教育が必要との信念から酪農学園大学を創設した。はじめは半信半疑だった私もその主義に賛同するようになった」（P12）と、紹介している。そして、「原義から見て農業には自然保護、環境保全、都市景観等々多くのものを網羅している。今になってとってつけたようにこれらの言葉を使う向きがあるが酪農学園大学で使うのならそこには創設者の精神がどのように止揚されているのかをはつきりさ

せておくべきだろう」(P 13) と、指摘する。

また開発途上国でたくさんの卒業生が活躍していることに触れ、因習にとられず自分の信念で生きている日本人が増えることが喜ばしいことではあるが、これに大学が主体的な役割を果たしているとは言い難い」(P 15) ことも指摘する。

さらに獣医学科の教育方向に対しても「酪農学園大学の特色である臨床分野の充実をおろそかにした」(P 16) との指摘は伴侶動物を加えての意見だろうか。研究室の充実の方向性についての意見だろうか。私は酪農学園大学の獣医教育は産業動物を中心としている唯一の大学とと思っていたが、現在の動物病院では伴侶動物の診療も積極的にやっているように感じている。

戦後の「窮乏に沈める国」は現在どのような状態と評価したらいいのだろうか。

(3) アーサー神塚「二十一世紀に向けて三愛精神の意義と役割」(二〇〇六年一月)

神塚先生は実のところ僕はよく知らないのであるが、伝説的な方のように聞いている。このテーマは二〇〇五年ホームカミングデーの時の講演をまとめたものだ。三愛精神についてここで触れたい。

神塚先生は大正一二年アメリカカリフォルニア州で生まれる。昭和一五年キリスト教の信仰を受け入れ、牧師になることを決意する。次の年、賀川豊彦の講演を聴き強い感銘を受けたそうだ。同年サン・ルイス・オビル短大、リドレイ短大、昭和一七年日米開戦のため強制収容所に収容される。その後、パーク大学で心理学学士号。昭和二四年マコーミック神学校で神学学士号。同年牧師職に任命。同年日本基督教団の協力宣教師。昭和二六年酪農学園短期大学のチャプレン及び宗教部の部長となり、その後も酪農学園大学での勤務と三愛塾運動に尽力。昭和四〇年まで務めた。その後の経歴については省略する。平成二四年四月天に召される（「アーサー神塚先生追悼記念論文集」より）。

本学で三愛精神を取り入れるいきさつについては、酪農学園後援会「佐藤貢の生涯」（P 86）で触れられている。かなり広く知られていることである

が、「デンマーク再興の故事に由来していること、グルンドヴィ牧師やダルガスの三愛精神であった。「神を愛する」ということは聖書の「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして主なるあなたの神を愛せよ」いう言葉からである。「人を愛する」ということは、「自分を愛する如く隣人を愛せよ」という、やはり聖書の言葉である。それは究極においては社会を愛することであり、協同友愛の社会や人類の恒久平和につながることもある。そしてデンマークでは「祖国愛」だが、黒澤はあえて「土を愛する」とした。それは耕地にとどまらず、社会や国土愛、あるいは地球や自然環境を大切にすることにつながっていくからである。したがって、ここで言う「土」とは土壤という物理的意味合いと、国土愛や社会愛等哲学的な意味合いの二面性が凝縮されたものだろう」(同P 86～87)と、佐藤貢は解説している。

ところで、神塚先生は「土を愛する」ということについて沖縄やメキシコ、あるいはアフリカなどの事例を挙げて、「土地は命であること、・・・この学園に、「土を愛する」という三愛精神が与えられたということは、預言的な神のなされたこと」(P 11)、あるいは「神様からの重大なお示しです」(P

13)と、指摘している。

また、「人を愛する」については比較的わかりやすい言葉であるが、人と人の間には「上から注がれてくる神の御愛」(P 16)があることについて触れている。「この愛の力が様々な対立の解決する方法である」(P 16)と。

最後に「神を愛する」ということについては、「三愛精神の中で「は」を使えるのは「神は愛である」だけであること、つまり、私たちが神を愛することが主ではなくて「神の愛が私たちの心に注がれていて」、・・・その下で私たちは神を愛し、人を愛し、土を愛するという力が与えられていくのだと考えます」(P 19)と。そして「この学園は神様から祝福されていると思います。この機会に私たちに与えられた三愛精神の意義について、それが二一世紀にどういう役割を持っているかを、皆さんと共に考えていきたい」(P 21)と結んでいる。

かねがね「三愛精神」については神と人と土が同列に並んでいることに疑問を感じていたが、そういう風に理解すればいいのかと改めて感じた。また、国を土に変えたことで、いかにも酪農学園らしい「精神」になって、「健土健民」

と並んで酪農学園を他のキリスト教主義大学とは異なった校風を作り上げることになったのだと、自分では納得した。

(4) 井上昌保「大学自治における学生の役割について」(二〇一一年一月)  
井上先生との出会いは確か大学一年の頃だ。当時先生とはアダム・スミスの「国富論」英語版の勉強会を行ったり、先生のご自宅でご馳走になったりしたので、特別思い出のある先生だ。先生は三愛女子高校教諭から始まり、酪農学園大学講師、さらに三愛高校校長、そして再び酪農学園大学教授と、結構波乱万丈な人生だったようだ。

先生はこの酪農学園の精神シリーズの中でなぜ大学の自治と学生の役割をテーマにしたのだろうか。先生は定年退任記念最終講義で「黒澤西蔵と建学の精神」について話をしているので重複を避けたと書かれている。しかし先生の生涯流れる思想的な背景は平和憲法と民主化運動ではないか。その点でも酪農学園の歴史の中で、学園の民主化運動においてもそこに学生たちがどのようにかかわったのか、歴史的な検証をしておきたかったのではないか。

昭和三九年の樋浦学長更迭問題は、入学したばかりの僕にとっては一種の災難でしかなかった。学生になったばかりであったので、いきなり授業のボイコット、そして先輩たちによる授業は訳の分からなさを増幅させた。授業は何も教室ばかりではないので、教員たちの役割をもっと形の見えるようにしてくれたらと思った。もともと、当時の大学施設のおんぼろ度は「大したもの」であった。農経の建物は中島中学校（札幌）の木造でおさがりである。この更迭問題は「二年前に結成された職員組合はこの事態を学園の民主化の好機ととらえ」たようであるが、樋浦学長の更迭は解除されることはなかった。しかし当時の社会情勢を反映して、教授会、理事会、そして学生の三者が参加する形で、「学則」の改定や「学長選任規定」の制定、などが実現され、さらに施設の改善・整備が図られたとある。現在の学生たちには考えられないような、学生参加型の学園づくりである。

この時期の問題解決は確実に酪農学園大学の草創期の「生みの苦しみ」の歴史を表すものだ。「本学は、私立大学としての自治のあり方、教授会を中心とする大学構成員の位置付けと役割、私学における理事会の立場と責任の

明確化、大学自治の原則に基づく大学運営に関する諸規定の民主的制定・改定と運用、学生会・学生の位置づけ、対話の必要性等々について、得難い貴重な教訓と成果を得た・・・その後の全国的な大学紛争の洗礼は本学では対話を基本に対処でき、本学の民主化への大きな前進だった」(P6)と、先生は評価している。

教員と学生の立場の違い、職員のかかわり方、理事会の役割など、現在においてもおなほ課題が多い本学園であるが、僕自身としては「教員が中核にいて、オーバーラップとはいえ職員が取り巻き、外円に学生が位置付けられている」(P16)との考え方は若干変化してきているかもしれない。職員にはとても優秀な人もいて、教員と同等な役割を果たせる方もいる。その点で職員を育てていく体制も問われている。教授会で学長選にかかわって、良識の府ならぬ票読みなどの行為が暗躍してきた過去を見てきた人間としては制度を作って心入らずではいけない。

学生が卒業して、外野から学園の在り方や教育の在り方など意見を拾い上げるシステムも考えないといけない。

一つだけ付け加えておくと先生の最終講義「黒澤西蔵と建学の精神」の中で、(第二次世界大戦の)戦争中の黒澤西蔵の思想と行動については負の部分として今まで多くは語られることはなかったが、井上先生は詳しく検証されている。戦時下においてすべての国民が「天皇制軍国主義侵略戦争の国是、皇国史観という枠組み」において酪農義塾においても、積極的な協力体制が取られたことがあったが、戦後はその「贖罪」とクリスチャンとしての罪の自覚から、「死をもってするのではなく、残された人生の中で、新しく与えられる諸課題を、まさに死を償う「贖罪」の行為として受け止め、それを、誠意を持って遂行するしかなかった」(P 25)としている。必読すべき部分である。

(5) 太田一男「酪農学園の教育理念とキリスト教教育」(二〇一二年三月)  
太田先生は昭和一〇年、韓国光州で生まれ、六年後に岡山県津山市に帰国。昭和三九年に本学講師、昭和五七年教授、平成一三年退職、平成一七年まで嘱託教授をされている。実に四一年間本学とともに歩まれている。井上先生

と同時期に採用されているが、昔は一つの部屋をベニヤ板のような壁で区切られていて真ん中に電話があったように記憶している。先生は「当時の酪農学園がいかにも本気でキリスト教教育をするためにキリスト者教師を集めていたことか」(P2)と、二二名の教員名を挙げているが、すごい数のキリスト者教員が本学で採用されたのだなど、改めて感心した。それはとりもなおさず酪農学園が「敗戦後の日本の再興に供する三愛教育事業を展開するに際し、その担い手をキリスト教信徒の群れに委ねようとしたことを示している」(P3)と、指摘しているようにそのまま教員数の結果となって現れていたのだろう。

ただ、「キリスト教徒の少ない日本においてキリスト教信仰を持たない先生方の協力なくして学園の教育事業も転嫁できるものではないということも明らかなことです・・・特に大学においては教師の専門性や研究者としての資質から・・・」「反対でなければいい」程度のものになるケースが多いと思われる」(P5)とも指摘する。しかし太田先生はマザー・テレサを事例に出して、彼女の「働きに加わるためには資格はいりません。国家の規制もあ

りません。必要とされているのは同じ思いと祈りの共有というものです」(P8)というが、同時に「教師など国家が認め求める資格を有する働き手を必要などころでは祈りを共有する人と共に働くということとはとても困難なこととなる」(P9)ともいう。

先生のこだわりは「キリスト教信仰に立つ教育とキリスト教主義教育は同じようでも必ずしも同じでないこと、・・・教育の原点にあるべき信仰が問われなくなってきた」(P10)ことに警鐘を鳴らしている。

また、理事長、学長、校長などが、「クリスチャンコード」が要求されない本学のシステムに対し、真正面から問題提起している。キリスト教信仰に基づく教育が形骸化する、「実践なき信仰」などの言葉や「宣教という課題が、時として、教師や関係者の批判の対象にすらなることもある」(P12)という。僕の感想を言えば、本学で、理事長・学長などに対してクリスチャンコードが要求されないことは、ある意味長い歴史的経過の中で、選択されてきた方法である。学生時代、学内で「カトリック研究会」に参加していた僕にとつては、結構自由な雰囲気の中で活動をしていた。特段キリスト者であること

をアピールする教員は誰もいなかったように思う。そんな学園の想いすら知らなかった。当時、木造の学生会館で学長と学生の集会に参加したが、その時佐藤貢学長が「望んで学長をやっているわけではない」と発言して僕たちは仰天したけれど、今思えば、学長はやりたくなかったのが本音かもしれない。その後もマルクス主義者の先生が学長事務取扱となった時代もあった。クリスチャンであるかどうかよりは学内運営能力があるかどうかのほうが優先されてきたのではないか。

また、三愛主義と並んで健土健民が本学の大きな精神的よりどころであったが、それは「酪農振興による救国」思想そのものであったし、酪農学園という名称が今日まで連綿とつながってきたとも思う。酪農という名称からはキリスト教主義大学はイメージしにくいことも確かである。ただ以上述べた中で本学園初期のころの理念などが形骸化しているとの先生の指摘はいつか正面から検討すべきことかもしれない。先生のその後の文章の紹介については、省略せざるを得なかったのはとても心苦しいので、ぜひ本文をお読みいただきたい。

(6) 川上克己 『心の故郷』の想いを現実に(二〇一二年一〇月)

川上先生は昭和一七年江別市で生まれ、現在まで人生のほとんどを江別で過ごす。昭和三八年酪農学園大学酪農学科に入学、卒業後一年間のみ会社勤務を経て酪農学園に、今度は助手として戻り、昭和四七年講師、平成元年教授となり、平成二〇年退職(非常勤講師を二年)、四〇年間勤務される。

先生の生い立ちが語られているが、実家は「野幌開拓・北越殖民社の入植者であって、現在の江別―恵庭線の東部低湿地帯の千歳川流域で、野幌原始林登満別口の東部」(P4)だそうだ。当時は水害の常襲地であったこと、農家(次男)であることから、幼少のころから農業作業の手伝いをさせられた、しかし向学心の強い多感な時期を過ごす。そのためこれからの「農業は機械化しなければだめだ」、という考えが強かった。病気や家業の手伝いなどで二年間の遅れになったが、「希望から離れた暗いスタート」(P8)である酪農大学への入学であったようだ。「酪農大学という烙印」という言葉も登場する。

農家出身ということもあって、建学の精神については「実学」、「健土健民」

は無意識に受け入れられるが、三愛精神は「心に響かなかった」そうだ。そこからが先生らしい。キリスト教を学ぼうと礼拝には必ず出席し、聖書も読んで、結果として「酪農大学で一番学んだことはキリスト教であると断言」(P 9) している。本学での就職に際して最初に決着したのが、野幌教会に行くことであつたそうだ。文中にはしばしばリセットという言葉が登場する。高校時代の休学の経験からのリセット、物理・数学からのリセット(？)、キリスト教の信仰に対する決着あるいは宗教に対する行動のリセットである。僕なんかは人生上どうもリセットが下手な人間で、いろいろなことをずると継続するので、先生のような物理的というか、数学的というか白黒を決着するタイプはうらやましい。

さて、先生は酪農学園大学で勤務を始めて、すぐ北大の岡村峻民教授の下で研究をはじめ、昭和五二年には博士号「フォーレージブローワに関する研究」を取得する。また、健康のためにマラソン、テニス、スキー、登山、その他絵画など多彩な活動をする。「私の研究・教育を支えた柱は身体を動かすことを通じての身体の健康と心の健康である」(P 15) だそうだ。

研究生生活四〇年間の総括は「農業工学のこころ」を出版した。また千歳川研究は退職後も取り組んでおり、「心の総括をしたい」との思いである。

絵画についても絵の仲間たちは先生のことを「江別のゴッホ」と呼んでいるそうだ。どうやら先生の描く「心の故郷」は生まれ育った環境から、酪農学園大学、農業機械学研究、千歳川研究、絵画やスポーツと、川の流れのように脈々と続いてきていて、リセットしようにもリセットできないこととなっていて、酪農学園での研究生生活の中で先生の精神を作り上げ、支えてきていると思う。

(7) 種池哲朗「獣医学科―基礎教室の誕生とその後の変遷から探る―」

(二〇一三年一〇月)

種池先生は昭和一七年福岡県北九州市で生まれる。幼少の頃より動物が好きであったことや高校の教師が感染症の知識を持っていたことなどが獣医師を目指した動機といえはいえるかもしれない(P4) そうだ。その後鳥取大学農学部獣医学科に進み、診療実習を通じて臨床獣医師を目指す。しかし専

門書「動物の生理学、情報」などから獣医臨床から基礎学志向へ転換、そして北大大学院進学を果たす。修士課程と博士課程をへて、昭和四五年牛島純一教授の家畜生理学教室講師として着任、昭和六二年教授、平成二〇年退職まで在職三八年間となる。その間昭和五二年、大学院修士課程設置のために家畜生理学教室から転出、家畜薬理学教室として独立、また学内第三番目に設置された獣医学科は平成八年獣医学部獣医学科に改組転換された。宿願であったそうだ。我が国三番目の誕生であった。先生は平棟孝志先生の後を継ぐ二代目学部長として「草創期と発展・充実に在職し：酪農学園史の一画期に立ち会うことが出来た」(P19)ことを実感した。

しかしその後の酪農学園大学獣医学部の展開には厳しい指摘が続く。いわゆる講座制を廃止し、部門制を導入して新教授が量産されたこと、卒業論文が選択制になったこと、ある教室を解散消失させたことなど、ストレートな批判だ。また、従来から三学部八学科まで発展してきたものを平成二三年度から二学群五学類の新体制になったが、伴侶動物医療の支援スタッフを養成する修業年限四年の新学科・獣医保健看護学類の新設に対しても批判が展開

する。

「歴史がありなじみの深い駅名（学部・学科）を新駅名（学群・学類）に変えてしまった」（P23）という。四年制の保健看護学類に対しても具体的な批判が続く。そのためリゴリズムなどの批判が先生に浴びせられたのだろう。

オンリーワンの大学、ブランド力を上げるには、大学の実力を上げていくしかないという先生の信念が伝わる圧巻の文章である。最後に先生は「教育と研究の現場は、教員の力量、資質が問われる能力主義の世界である。科学する姿勢、真理真実を探求する楽しさと厳しさ、自ら学術的にも人間的にも成長していく姿を身近に見せながら、多様性を認め寛容な精神で学生たちと対峙すればおのずと酪農学園創立者たちの精神の系譜は守られ、思想は継承される。学校法人酪農学園の精神とそこで展開されている教育研究活動には「人を変え豊かにする力がある」と確信している」（P32）と結ぶ。

実に率直でストレートな意見だ。日頃から裏表のない先生だと認識していたが、種池先生の意見に答えるには、研究成果はもちろんのこと今の学群・

書類が広く受験生に理解されるよう一層の努力が求められることは言うまでもないし、保健看護学類の一層の魅力づくりにも期待したい。

(8) 村岡範男「協同組合の社会的意義」(二〇一五年二月)

村岡先生は昭和二三年鹿児島県鹿児島市で生まれる。昭和四六年北海道大学農学部農業経済学科卒業、そのまま修士課程、博士課程に進み、昭和五一年単位取得後、酪農学園大学農業経済学科の嘱託講師として二年間勤務、昭和五三年専任講師として採用、平成九年教授となり、平成二六年まで、実に三七年間まさに農業協同組合論・協同組合論ひと筋の研究生活であった。本文において先生の私生活は全く垣間見ることはできないが、先生は音楽批評(結構有名なようだ)やオペラ鑑賞(ドイツ出張中はかなり楽しんだようだ)、さらには野球(巨人ファン?)をこよなく愛しているようである。

昭和五三年、前任者の大高全洋先生から引き継いで以来「ドイツにおける農協の発達」を生涯の研究テーマに定めたそうだ。協同組合の発達についてはイギリスのロッチデール公正先駆者組合(一八四四年)は世界最初の協同

組合で、ロッチデール原則が有名である。当時「先進資本主義国イギリスの都市部でそれも消費組合という形で成立した事実は資本主義発達史の観点からも象徴的であった」(P6)。いわゆる「経済的弱者の自衛組織」の誕生である。その後ヨーロッパ大陸でも様々な協同組合が誕生したが、「最もインパクトが強かったのはドイツの信用組合である」(P9)として、紹介している。「ドイツでの協同組合は一八五〇年代以降でイギリスとは全く異なり信用組合という形態であった」こと、「後進資本主義国ドイツは小商品生産者を完全に分解することが出来ず、都市部には多くの手工業者を、農村部には大量の小農経営を残存させた」(P10)が、「その課題に真正面から取り組んだのは都市部ではヘルマン・シユルツェーデーリチュ、農村部ではフリードリッヒ・ヴィルヘルム・ライファイゼンであり」(P11)、特にライファイゼンは我が国の産業組合に多大な影響を与えた。「彼は農村住民の窮状を救済するために一八六二年初めて信用組合を設立、組合員の借入金を組合が債務保証した。当時大きな役割を演じていた村落維持機能とキリスト教の教区を梃子にして組織された」(P13) そうだ。

「二人は万人のために万人は一人のために」という言葉は、札幌の生活協同組合本部に賀川豊彦が説いた協同組合の中心思想の書が掲げてある。賀川豊彦は酪農讃歌の作詞者でもあるが、社会運動家、キリスト教伝道者としても有名だそうだ。「スラム街の聖者」と呼ばれた。仙北富志和先生によると黒澤西蔵とは親交があつて、何度か黒澤の自宅にも泊まったそうだ。ビツクリである。

さて、ドイツの場合、ライプハイゼンの思想は瞬く間にドイツ全土の農村住民に受け入れられて、社会情勢の変化から総合農協化への道を歩む（P13）。その後、ライプハイゼン連盟（農協中央会）設立や政策・行政との結びつきの弱さ、総合農協化の軌道修正の経過など先生の熱弁が続く。

二〇一二年国連が「国際協同組合元年」に採択、協同組合という組織が世界的に注目されているにもかかわらず、「日本の教育機関でそれにかかわるカリキュラムが近年少なくなる一方であるが、農業経済学科では協同組合関連の科目をカリキュラムの柱に据えてきたが、それこそが酪農学園の精神につながるものという自覚が底流にあった」（P23）と指摘する。本文では

北海道製酪販売組合のことには触れていないが、一九二三年に「酪農民のための酪農民が経営する酪農民の組合」酪農学園大学「酪農学園の創立」(P 35)が設立され、さらにその一〇年後の総会で「社団法人北海道酪農義塾」の設立が決定されているので、本学との関連性については言うまでもないことだろう。

最近また日本の農協に対するバッシングがますます激しくなることを先生は危惧するが、同時に「経済的弱者の自衛組織」としての協同組合・農業協同組合の存在意義をアピールし、その必要性を正しく認識してもらう努力を重ねることは酪農学園大学の社会的責務である(P 24)と結ぶ。

(9) 小山久一「酪農学園の建学の精神に育てられて」(二〇一六年二月)  
小山先生は昭和二二年北海道伊達市に生まれた。その後酪農学園大学には昭和四三年入学、昭和五〇年に岩手大学大学院修士課程を修了、そのまま酪農学園大学で採用され家畜繁殖学講座の助手、五三年講師、平成三年にはコーネル大学客員准教授、そして平成九年教授、平成二五年定年退職となる。現

在も「建学原論」という授業を担当し、酪農学園同窓会会長、大学同窓会校友会会長として活躍中である。特任教授期間を含めると合計四一年にもなるそうだ。

テーマに即して、酪農学園大学入学のころからの回想から始まる。入学式では大学の礼拝形式の式典に戸惑いながらの出発であったが、授業によつて「学問とはなんと理路整然としていて謎解きのようで面白いものだと思うようになってきた」（P3） そうだ。大学二年生の委託実習において「酪農学園大学の真の力はほかの大学と異なり、別物であると感じる時が来た」（P4） そうだ。「酪農家が酪農学園大学に求めている教育力を、ミルカー操作を通して確認していた」（P6） ことを知る。自分では「酪農学園大学にはネームバリューがないと思ひ込んでいたこと」（P4）、そのため「頼りになるのは自分だけであると思ひ込んでいたのが、大学の教育への信頼や建学の精神への愛着に変わつて」（P7） いった そうだ。また学生時代の礼拝については、「その意義を疑問視する学生もいたが、彼らも礼拝の終わった後のこころの軽さは私と同じで、聖書の言葉に励まされ力づけられた」（P8） と率直に

感想を述べている。礼拝は短い時間ではあるが、僕も聖書の言葉によってさわやかな風が自分を通り過ぎていくようで、不思議な時間を共有できる。

さて、先生は家畜繁殖学の教員となったのは昭和五〇年であるが、あまり専門分野のお話はしない。牛の人工授精が液状精液から凍結精液に移行する過程での精子生理や受精のメカニズムや精子濃度の話くらいである。研究の苦労話はいくらでもあると思うが、建学の精神という課題にあくまでも忠実に展開する。肩の力を抜いて「酪農学園大学卒業」の刺青の話である。当時の学生・卒業生の誰もが感じ、また背負っていると感じたことであるが、「酪農学園大学卒業」という刺青。しかし教員になってそれを誇りにする自分に気づく（P16）のである。

最後に「社会に出た卒業生に会った時、彼らの話の端々に、はつきりとは見えないまでも三愛精神を感じるが多々ある。その時は酪農学園大学の教育力を感じ、建学の精神は受け継がれ、生きていくのうれしさがこみあげてくる。同時に、このような気付きを通して自分の中に育っている建学の精神にハッと、やはり酪農学園大学に育てられ生かされてきたと痛感する

のであった」(P 17～18)と神秘的ですらある言葉で終わる。

(10) 工藤英一「酪農学園大学との出会いと学生たちとの思い出」(二〇一六年九月)

これまで九人の先生方のお話を紹介し、自分なりの意見を付加したところもある。失礼な部分があったとも思うがお許し願いたい。自分のことを書くのはすでに蛇足的に感じるが、簡単な略歴ぐらいいは述べておきたい。僕は昭和一九年鳥取県鳥取市で生まれた。すぐ戦争が終わったので、北海道の母の実家(当別)に疎開、その後帯広で過ごす。昭和三九年酪農学園大学農業経済学科に入学、昭和四三年東京農工大学院修士課程、そして北海道大学大学院博士課程に進学、その後六年間酪農総合研究所の勤務を経て、桜井豊先生の後任講師として酪農学園大学の農業政策学研究室に勤務。気が付いたら三八歳になっていた。酪農学園大学には「狭き門」から入った。ようやく戻ってきたという感情である。この「狭き門」は今や閉まっていることが多いがなぜか。酪農学園はこの門に対する思想をよく理解していると思うが。

さて、農経館は当時のまま木造で桜井先生が使用していた研究室を使うことになった。最初のゼミ生はよく覚えていいる。現在入試課の加藤浩君など桜井先生の最後のゼミ生でもある。授業については農業政策学と酪農政策論それぞれ一年間の授業である。これはある意味とても重い課題であった。しばらくはそのまま経過したが、結果的には農業政策学は残して、酪農政策論についてはその中に含める方向を取った。時代の流れも感じて、経済政策論や地域経済論、さらに「地域マイスター実習」という、江別という地域限定の授業科目や実習を作った。酪農学園大学が、江別という地域に存在しながら江別の地域を支えている人たちの話や、江別市を中心とした農業や経済を授業してこなかったことを反省して、江別市役所の方や、経済人・農家などに登場していただくものである。これは学生たちに江別市を理解してもらうのにかなり役立ったと思う。さらに、まちおこし運動に参加して、単位につなげようとしたのが、「地域マイスター実習」である。学科として地域マイスターの資格を与えようとするもので、卒業の時に資格をもって卒業してほしいとの願いである。

また、当時就職対策として、農業改良普及員の資格試験があつて、今岡久人先生がその対策に熱心に取り組んでいたが、僕のゼミ生はその資料をいただき、ちゃっかり合格していた。心苦しく思っていたが、先生が定年を迎えたので、その後を引き継ぐことにした。月曜から金曜まで、午後六時から八時頃まで毎日の勉強会だ。初年度は学生たちが途中で挫折、次の年からはゼミ生の募集には普及員対策をすることを明記したので、勉強をする意欲ある学生が集まった。確か八名全員合格だったと思う。その後もほぼ全員合格を続けた。他のゼミ生や他の学科の学生も参加してきた。最高で一八名の合格者を出して、普及員対策の研究室として一定の成果を上げたと思う。しかし、そのうち国は大学院修士課程の卒業生の資格を要求することになってきて、学生に六年間の受験対策を要求すべきか悩んだが、学生にその資格だけのために苦勞させても、普及員の採用状況がどんどん厳しくなる傾向であったので、この対策はやめることにした。学科長をやっていたこともあり、普及員対策は確かに受験生対策になったが、その後受験生の心に響く何かないか探した。

当時、岐阜経済大学で岐阜中心市街地でのまちおこし運動をやっている、学生も参加していた。これは地域活動になるし、次の目標にならないかと模索していたところ、江別市「大麻（おおあさ）銀座商店街」の八島会長から、空き店舗のお誘いである。正直迷ったけれど、学生がやりましようという。学生に背中を押されてその後一〇年間続けた。はじめはリサイクルショップとして開店したが、訳の分からないものを持ち込む客が多いため、在庫ばかり増える。使い古しの長靴まで持ち込まれる。そこで半年後、学生の出身地から食品加工品、江別から農産物・加工品、石狩市からはたまに魚を仕入れて販売する作戦に変えた。この方法は見事に当たり、その後の継続が確実になった。

週一回、土曜日だけの活動であり、毎週の仕入れ、値札付け、販売、在庫調べ、などが基本であったが、その他銀座商店街夏祭りのピング大会の企画や、「江別やきもの市」運営委員会参加、まちづくり運動をやっている全国の大学との研究会参加・発表、などなど学生は大変だったと思う。教員としては学生に丸投げをするとうまくいかなくなるので、できるだけ一緒に活動をした。

話は尽きないけれど、酪農学園大学の農業経済学科に入学してくる学生は確かに高校生の時はあまり勉強してこなかったかもしれないが、何か目標が決まると、目が輝いてくる。教員はそばで少し手伝う、そんな教員生活をして終わった。

今は「江北まちづくり会」の副会長として、様々なまちづくり活動に参加している。今度は若い農業後継者たちや高齢者たちが仲間であり、友人である。江別の野菜を販売したり、江別の小麦を使った料理、特にピザを作るための「ピザ窯」を北翔大学名誉教授の斎藤徹さんと二人三脚で製造・販売したり、大学時代から継続してきたベーコンを酪農学園大学の卒業生の中村章さん（肉製品製造学教室出身）に管理栄養士としての指導を受け、一緒に製造している。また、酪農学園生活協同組合におられた野尻裕一（調理師）さんも仲間である。「米澤レンガ」社長の米澤照二さんには僕たちの活動を日頃から大いに助けてもらっている。感謝の意味も含め特に触れておきたい。さらに「江北まちづくり会」の菅原昇事務局長（前江別市消防長）の手腕と実行力は特記すべきことで、彼がいないとこの運動は成立しない。

このような様々な人の輪を通じて、新しいビジネスというか隙間産業化、六次産業化の道も模索しながら、さらに現在はウインナー・ソーセージを試作中で、鮫島邦彦名誉教授のご指導も受けた。これらを販売して、多少の利益が上がるが、それをまちづくりの費用に計上する。大学時代に学生と活動していた思想と同じだ。自分たちの活動資金はできるだけ自分たちで賄う。その基本だけは忘れたくない。また、このような活動は江別の農家さんに何か刺激を与えることにつながるのではないかと考えている。

ホームページもご覧ください。 <http://ekudoh4750.sakurane.jp>

七一歳になったのでもう若くはないが、これらの活動は前向きな意識を持つのに役立つ。また、畑仕事、野鳥観察、バードカービングの木彫り教室などは頭の切り替えにもなり、結構多忙である。「憎まれっ子世にはばかる」をモットーに生きていくつもりだ。

## 二 新たな「酪農学園の精神」の方向

### ① 「自主独立」の精神を

僕のような酪農学園大学で学んだ学生が当時感じていたのは小山先生や川上先生が感じていた感情と同じである。卒業生の中には卒業生であることを隠していた方もいた。北海道大学に進学した女子学生が、酪農一号とか二号とか陰で揶揄されていて悔しい思いをしただろう。そういう思いは今でも学生と共有する。現在も講師で来る先生方の言葉からも「酪農大学の学生を下に見る態度」がみられることを学生たちから聞いたこともある。卒業して様々な分野に散らばっていった卒業生には「なにくそ精神」、「自主独立の精神」を言いたい。どのような大学を出ても、大学時代にどのようなことに取り組んできたか、それが問われる。酪農学園の精神については「三愛精神」や「健土健民」はよく言われる言葉だが、それは運営者側の精神でもある。

大学というところは高校までと違って、勉強するにも、研究するにも、すべて自分から出発する。確かに、建学の精神に関する授業や礼拝で学んだと

してもそこから先は自分で考え、実践し、理解し、自らの足で前に進まなければならぬ。黒澤西蔵の精神は世の中の理不尽な出来事に対して立ち向かう、実践的に闘う姿勢だ。その姿勢にびっくりし、感動し、共感した。また経済的弱者である農民のための酪連を立ち上げ、酪農義塾を立ち上げ、やがて、酪農学園という大きな組織を立ち上げたが、それもそういう黒澤西蔵の姿勢が継続していることであると理解している。その根本のところ流れるのは「自主独立」の姿勢ではないかと感じている。国にすべてイエスマンのところではできない姿勢ではない。

現在酪農学園は北海道の酪農に関する大学として全国的にも有名になってきた。だから北海道酪農大学という方もいる。財政的にも安定した大学と言われる。だが、これでいいのか。学園は基本的に学生の納付金で成り立っているし、国家の補助もいただいている。その姿勢に安穩としていないか。「農民は役人に頭を下げなくてもいい」という言葉は大学で学んだ言葉だ。学生が入学してくると基本的にはその後の四年間収入は約束される。現在経済格差が問題になっているが、経済的に弱者である学生の納付金に対し、本学は

他の大学などより割高である。酪農学園が出発したところは全寮制や授業料を少なくする工夫がいろいろ取られていた。もっと学生の納付金比率を下げる工夫があつてもよいのではないか。

授業料の支払いに対しては経済レベルに応じた授業料のありかたや、経済的困窮者の学生に対して大学内での仕事斡旋（広く知らせる）、学生の起業活動への援助などいろいろあるのではないか。国からの補助金を少しでも減らす工夫もすべきだ。

酪農学園だからこそできる付加価値化の方向、学生参加型でもよい。酪農学園らしい「自主独立」の精神を重んじた新しい取り組みに期待したい。

②これからの「健土健民」とは

単純な僕は、健土健民は健康な土づくりは健康な作物を作り、健康な人間を作ると思っていた。黒澤酉蔵の原点となった足尾銅山鉍毒事件と田中正造の天皇陛下直訴事件。明治政府以来の「富国強兵・殖産興業政策」のかなめとしての足尾銅山で銅の生産が行われ、その結果、周辺の国有林の伐採、精

鍊所から排出されるヒ素、亜硫酸ガス、森林は破壊され、渡良瀬川の洪水、  
鉍毒によって川の沿線住民は作物の汚染により、健康被害「酪農学園の創立  
―黒澤酉蔵と建学の精神」(P8)が甚大だった。だから、すべての出発点  
は「土」にあると感じた。酪農学園でも土づくりは畑やデントコーン作りの  
基本にあると考えたい。牛が出発点でもある。だから良い土づくりには良い  
堆肥作りがあると信じたい。堆肥で電気を作るのはあくまでも副次的産物で  
ある。

二〇一六年三月一三日「さよなら原発―北海道集会」という集まりがあつた。平成二三年福島原子力発電所のメルトダウンによってなんと、原発関連死者数は三、三九六人、避難者一七万人だそうだ。原子力は安全だと言い続けてきた国の主張はもの見事に崩れた。今では原子力発電所はとても危険であつて、一度事故が起これば、取り返しがつかないことになることを国民は意識を共有した。ましてや、酪農学園である。僕がその集会に参加したのは呼びかけ人に麻田信二前理事長の名前を見たからだ。原子力発電所の事故によって起こった土の汚染は人々の健康被害だけでなくそこに住むことさえ

できなくなる。足尾鉍毒事件で渡良瀬川沿いの住民も同様であった。そこから北海道に避難した人たちが現在佐呂間町に住んでいる。そこには何事もなような田園風景が広がっていたが、当時故郷を捨てて避難した人たちはどんな気持であったであろうか。

八月六日は広島の実験投下日だ。世界で一つだけの国、日本で二発原子爆弾（長崎も含め）が投下されたが、今年アメリカの現職大統領オバマさんが広島を訪問した歴史的な年である。そのことに単純に喜んでいてもいいのか。僕はキリスト教の国が原爆を投下したことがどうしても理解できないでいた。アーサー神塚さんも遠藤周作を紹介した中で述べている。世界には今でも一五、三九五発の核爆弾が存在している。広島では今年一年間だけで被害者五、五一一人が亡くなっているし、合計死没者数は三〇万人を超える。広島市長は「絶対悪」という言葉を使う。

僕の意識は「土を汚す」ことに対して、絶対に無頓着になれない酪農学園の精神がそこにあるのではないかとおもう。その意味でも麻田さんが生協の会長としての立場だったかもしれないが、呼びかけ人になっていたのは良

かった。だが、今後酪農学園としての意思表示は求められてくるのではないか。「フクシマ」は単なる自然災害ではないし、原爆投下は正義なわけがないのだから。一つの事例であるが、真の「健土健民」とは何かが問われ続けるだろう。

### ③酪農学園大学らしい研究の方向を

最近発想の転換が重要だと感じることが多い。たとえばタマネギを切った時に涙が出るが、これは硫化アリルというものが気化して目の粘膜を刺激するそうだが、二〇〇七年に日本とニュージーランドの科学者が開発、ハウス食品の今井真介（筑波大学出身）さんは二〇一三年にイグノーベル賞を受賞したそうだ。切っても涙が出なくなるタマネギの開発。うーん！今まで何の疑問も感じていなかった。

また、TVの「カンブリア宮殿」という番組で紹介していたが、JIMEX（ライメックス）という会社では木を使わないで紙を作る技術の開発をした。今後ペーパーレスの時代になるかどうかかわからないが、確かに人類の歴史上で

は木を使用しないというのは考えられないことだ。しかもわが国でも豊富にある石灰石から作る技術だ。また、水を使わないというのも新発想だ。もう一つ、Spider（スパイバー）という山形の繊維会社では人工「蜘蛛の糸」を現代技術によって量産化しているそうだ。まさにスパイダーマンの世界だが、いわゆる布を作るのだからビックリである。心が躍る技術である。

酪農学園大学は農業を基盤として、酪農製品や作物からできる技術、しかも発想が転換できるものが開発されたら面白い。研究分野を超えて研究が広がるものだと言計楽しい。食品はそもそも安全であるはずなので、健康でなおかつおいしいモノづくりも楽しいニュースになるだろう。しかもそのような研究は実際の社会で事業化できるのである。酪農学園大学発の新ビジネス、僕たちはそのようなニュースを心待ちにしている。

#### ④ 酪農学園らしい取り組みを

僕は常日頃から気になっていたが、酪農学園の取り組み方は手堅いかもしれないが、酪農学園として取り組んでいこうとする姿勢があまり見られない、

と言ったら言い過ぎだろうか。工藤の勝手な批判だと受け止められるのであろうか。例えば、以前学生部を担当した時に、学生の安全性のために地震など災害時に携帯電話での連絡システムを提案したが、ほとんど無視に近いものだった。今では個人で対策が出来るが、学園全体で学生の安全にもっとかわるべきだ。また、災害時の学園としての食料備蓄への取り組みに対しても、「そんなこととしてどうする」という感じだった。何かに取り組もうとする学園の意識が感じられなかった。今では東京のような地域では食料備蓄に對して対策をとっている大学は結構ある。北海道は食料があるので大丈夫という考えだろうか。学生の安全を考えるともう少し学園としての姿勢を示してほしい。水は本学では地下からくみ上げているそうだ。水道代がかからないそうだが、そういう考えだけでよいのか。災害時に水が出なくなったらどうするのか。補完対策は必要ではないか。

電気はソーラーシステムを取り入れることも必要だ。何よりも自分のことは自分で解決していくという意識改革は必要であろう。環境改善への意識は他のどの大学より強くて当然だ。環境改善のリーダーであることが常に求

められている。学園として環境改善のためにどのような取り組みをするのか、その姿勢が目に見えてくると、学園に対する評価が上がり、僕たちもそれを誇らしく思う。研究の分野だけに期待すべきではない。学園としてできることはまだまだあるのではないか。

⑤ いただいた恩は忘れてならない

それは雪印乳業（現雪印メグミルク）との関係だ。もともとは酪農学園と密接な関係があった会社だが、一時残念な事故があつて、会社の危機にさらされた。その時酪農学園として、あるいは我々教職員もそのような関係を保持しようとしたか。今でも忘れられないが、理事長や学長のあいさつではこの件についてはできるだけ触れなくておこうという姿勢が明確であつた。このことは今でも大いなる失敗であつたと認識している。酪農学園と雪印乳業は切っても切れない関係だ。酪農学園はその設立時代から雪印乳業には大変お世話になってきた。会社役員は給料から酪農学園に継続して支援してきたし、その他とても多くの支援をいただってきた。会社としての姿勢も獣医による

診療や経営診断など酪農家の育成に会社をあげて努力もしてきた会社で、そのような会社は他にないのではないか。その会社が危機に瀕していたとき、私たちがもつと積極的に支援すべきことではなかったか、今でも後悔している。いただいた恩は忘れてはならない。自戒も含めて触れておきたい。

#### ⑥ 酪農学園大学同窓会校友会に期待する

現場から離れて、五年以上経つのでわからないことも多いが、各地で活躍する卒業生たちが置かれている環境は昭和三〇年代く四〇年代とは大いに異なっていることは理解しているつもりである。僕の卒業生の中で高校の教員となった者がかなりの人数になっていて、卒業して農業高校に配置されると必ずと言っていいほど先輩たちが迎えてくれて、心強いというのを聞く。北大の卒業生が北海道庁でかなりいて心強いと思うが、なかなかそういう部分での卒業生の層の厚さはかなわなないかもしれない。でも各地で卒業生が頑張っているニュースを聞くと嬉しくなる。酪農家、畑作農家、稲作農家、付加価値型産業を起業している卒業生、JAや各地の役場職員など、学園・大

学としての積極的な支援もなく頑張っている方も多い。インターネットの普及によって、同窓生の活躍を紹介する機会が増えてきているが、ペーパーレス社会になるにはもっともっと後になるだろう。僕の友達も高齢化してきているので、メールやSNS（フェイスブックさらにラインなど）は、出しても返答がないことが多い。個人情報については簡単に紹介しづらい部分も多いが、ペーパーの役割はまだあると思う。だから頑張っている卒業生に焦点を当てて、その活躍を紹介し続けてほしい。卒業生を外から応援することにつながるだろう。今後の同窓会の活動に期待したい。

## 工藤 英一（くどう えいち） 略歴

- 昭和19年 鳥取県鳥取市で生まれる
- 昭和26年 帯広市移転（父の仕事の関係で）
- 昭和38年3月 北海道立帯広三条高校卒業
- 昭和43年3月 酪農学園大学農業経済学科卒業
- 昭和45年3月 東京農工大学大学院修士課程修了
- 昭和45年4月 北海道大学農学部研究生（2年間）
- 昭和50年3月 北海道大学大学院博士課程単位取得退学
- 昭和50年4月 日本学術振興会研究員
- 昭和51年4月 北海道大学農学部研究生
- 昭和52年4月 酪農総合研究所（6年間）
- 昭和57年3月 北海道大学より農学博士
- 昭和58年4月 酪農学園大学農業経済学科講師
- 昭和59年4月 酪農学園大学農業経済学科助教授
- 昭和60年4月 酪農学園大学学生部次長（2年間）
- 平成元年4月 酪農学園大学教務部次長（2年間）
- 平成3年4月 酪農学園大学農業経済学科教授
- 平成7年4月 酪農学園大学農業経済学科長（6年間）
- 平成13年4月 酪農学園大学教務部部长（4年間）
- 平成19年4月 酪農学園大学学生部部长（2年間）
- 平成21年4月 藤女子大学非常勤講師（～平成26年度）
- 平成21年10月 光塩女子短期大学非常勤講師（～平成26年度）
- 平成22年3月 酪農学園大学定年退職
- 平成22年4月 酪農学園大学嘱託教授・名誉教授
- 平成23年4月 酪農学園大学非常勤講師（3年間）

## 社会活動

江別市民活動団体「江北まちづくり会」副会長（平成26年～現在）

「大麻・文京台まちづくり会」副会長（平成27年～現在）

「酪農学園後援会」選考委員（平成26年～現在）

「江別市市民憲章検討委員会」会長（平成28年～）

発 行 酪農学園大学同窓会校友会  
住 所 北海道江別市文京台緑町582番地  
電 話 011-386-1196  
発行責任 酪農学園大学同窓会校友会  
事務局長 加 藤 清 雄  
発 行 2016年9月  
印 刷 社会福祉法人 北海道リハビリー  
電 話 011-375-2116